

三重大学生物資源100周年記念植樹

日時: 2023年2月17日(金) 13:15～15:00 記念講演および植樹(クマノザクラ)
2月24日(金) 13:00～13:30 記念植樹(抵抗性クロマツ)



趣旨

三重大学生物資源学部・生物資源学研究科は、1921年(大正10年)、大学の前身となった三重高等農林学校として設置されて以来、2021年(令和3年)12月10日をもって100周年を迎えました。学部・研究科内で行っている様々な年間行事等を「生物資源100周年記念行事」と位置づけ、卒業生や同窓会をはじめとした学部・研究科に関係する多くの方々との絆の強化を2023年(令和5年)3月まで進めています。本記念植樹は、そうした一連の行事の中で、記念樹の植栽によって記念行事の最終を飾るイベントとして企画・開催しました。

クマノザクラは100年ぶりに紀伊半島で新しい野生種のサクラとして発見されたもので、命名者の勝木博士による記念講演も行いました。また、昨今松枯れによって海岸や学内のクロマツも減少していますが、抵抗性の品種を今回植栽し、在来種と比較して、抵抗性の検証と炭素吸収量の測定等も兼ねて、将来の苗木養成も目的として、三重大学関係者で協力して植栽しました。

＜本件に関するお問合せ＞

三重大学生物資源学研究科チーム総務担当

TEL : 059-231-9673

E-mail : bio-somu@mie-u.ac.jp

ホームページ : <https://100.bio.mie-u.ac.jp/>

三重大学生物資源100周年記念行事 記念講演および植樹(クマノザクラ)

- ・クマノザクラの普及、苗木養成などの活動紹介
- ・卒業生による苗木の寄贈
- ・隣には、80周年時の記念植樹ソメイヨシノが今年も満開であることなど



生物資源100周年記念植樹

三重大学大学院生物資源学研究科は、2021年12月に三重高等農林学校からの開学100周年を迎えた。「100周年記念事業」として、2023年2月17日に1本のクマノザクラが、2023年2月24日に60本のクロマツが、それぞれ生物資源学研究科棟前と学内の圃場敷地に植えられた。



演習林職員による記念碑

クマノザクラ



植樹の前に、クマノザクラの命名者、勝木俊雄博士による講演が行われました。



クマノザクラ (勝木俊雄氏撮影)



自生地における満開のクマノザクラ
(熊野市紀和町長尾に生育する名木、
長尾美春桜、勝木俊雄氏撮影)



勝木俊雄
国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所 九州支所 産学官
民連携推進調整監

クマノザクラ (*Cerasus kumanoensis* T. Katsuki) は、紀伊半島南部にのみ分布する、2018年に命名された日本固有の野生のサクラです。サクラ属のように花が目立つ樹木での新種発見は、極めて珍しいことです。オオシマザクラの命名以来、日本のサクラ属として実に103年ぶりに命名されました。クマノザクラの特徴は、何といたってもその早い開花時期にあります。自生地では、ヤマザクラとの開花期の重複がほとんどみられないほどの早さです。

生物資源100周年記念植樹

クマノザクラ

クマノザクラの記念樹は中村昌幸氏によって寄付されたものです。中村氏は、生物資源学部第2回卒業生で、現在は鈴鹿市の「木楽Nakamura」で造園業を営まれています。勝木博士のクマノザクラ発見に至るまでの調査に足繁く同行され、貢献されました。また、寄付のサクラ苗はご自分で接ぎ木し育苗されたものです。



クマノザクラ苗の寄付者である中村昌幸氏には松村研究科長により感謝状が贈呈された。



伊藤学長、松村研究科長らによる植樹「長尾美春桜」の接木苗。

サクラメモ

サクラの野生種は、10～11種であるとされます。以前は国内産とされたカンヒザクラが、中国南部や台湾産であるとの考えが広がってきたため、10種だとする分類学者が増えています。サクラの品種は、500種以上とも言われるほど多いですがはっきりした数字は不明です。ソメイヨシノ、早咲きの河津桜、おしべが花弁化した八重桜は、栽培品種になります。

クマノザクラの普及

(一社)日本クマノザクラの会(勝木俊雄会長)が、2021年2月に、クマノザクラにかかわる様々な個人・団体がネットワークでつながり、協力していくことを目的として設立されました。紀伊半島南部に象徴的なこのクマノザクラの利活用は、地域の経済や文化の発展に大きく貢献することが期待されます。

三重大学生物資源100周年記念行事

記念植樹(抵抗性クロマツ)

松は三翠会館やキャンパス内に生育し、三重大前の町屋海岸にも松林が広がっています。残念ながらその姿は、以前に比べて貧相なものになっています。これは線虫という1mmほどの糸状の動物によるマツ材線虫病(一般に、マツ枯れ)のためです。この線虫の原産はアメリカで、日本のマツはなすすべがありません。そこで、この線虫に対抗能力のある松の植栽を学長、科長と行いました。



松メモ

松は常緑針葉樹の仲間ですが、マツという種は存在しません。日本では里山にはアカマツ、海岸にはクロマツが分布します。いずれもマツ材線虫病に対して弱い(感受性が高い)ので、マツノザイセンチュウの感染により多くの個体は死んでしまいます。そこで被害林で生残したマツの種子を集めてそこから本病に抵抗性の高い系統を探す作業で生まれたのが、抵抗性マツです。ただし、この抵抗性マツは「絶対枯れない」ということではなく、「枯れにくい」マツであることに注意が必要です。



抵抗性クロマツ植樹の看板
(演習林技術職員作)

なぜマツは枯れるのか？

日本のマツはアメリカ産の線虫に抵抗性が低い
1905年，長崎で初被害報告以降，都府県で被害

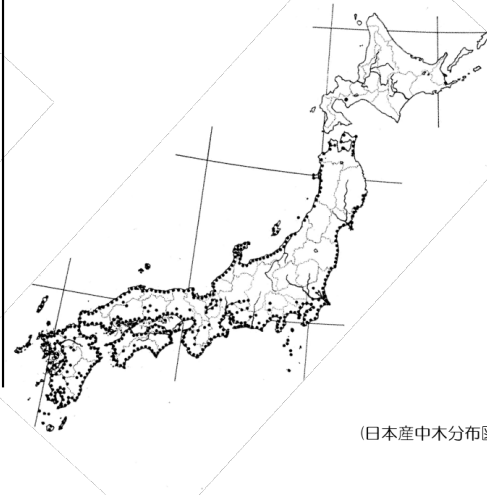


→→→→
輸入丸太

アカマツ (*Pinus densiflora*)
海拔0から200mに分布



クロマツ (*Pinus thunbergii*)
海岸付近・低海拔に分布



(日本産中木分布図表 1)

線虫メモ
分類的には「線形動物門」に属する動物類の総称です。マツ材線虫病の病原体はマツノザイセンチュウという線虫です。1905年に長崎で発見されて以降，この線虫はマツノマダラカミキリという昆虫に便乗して生息範囲を拡大し，青森県以南のマツ林で甚大な被害を及ぼしています。

マツノザイセンチュウ
(撮影 北上雄大)



クロマツに線虫を接種すると枯れる



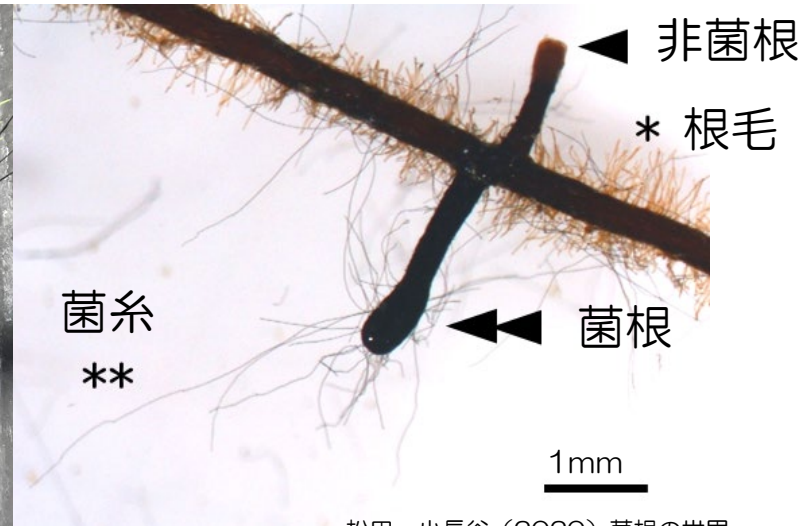
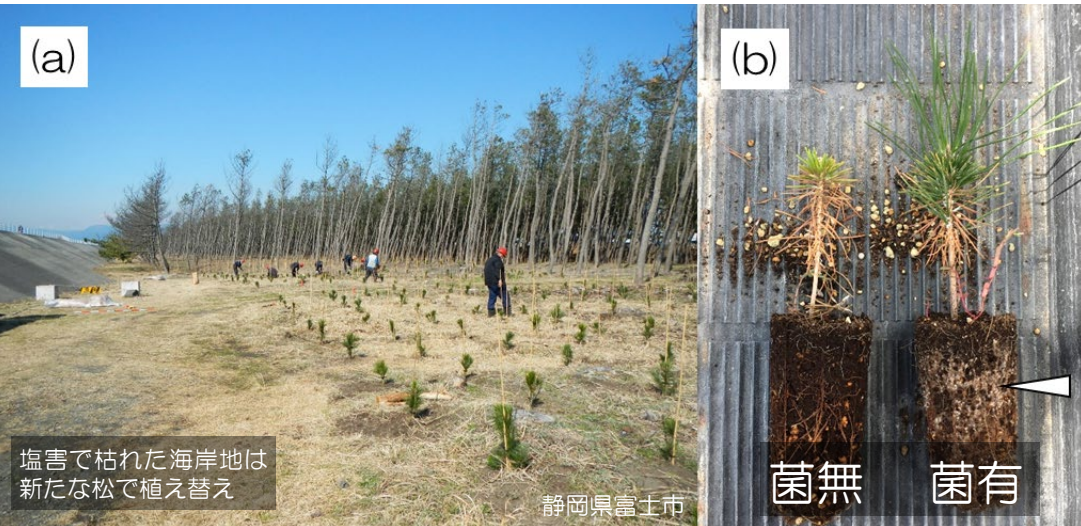
手前が抵抗性，奥側が普通のクロマツ



土を締め固め，根に共生する菌根菌から養水分をもらう

菌根菌が育む松林

根に住みつく微生物が樹木の生育の鍵
健全なクロマツが暮らしを守り, 豊かにする



松田・小長谷 (2020) 菌根の世界



植栽した松は10年もたたないうちに松ぼっくりを实らせ, キャンパスを緑豊かにするためのタネを届け, 三翠の一翼である「樹のみどり」を支えます. 今後, これら苗の生育を見守り, 炭素吸収源としての働きも調べていきます.



菌根菌メモ

陸上植物の8割の根に共生する土壤真菌類(カビ・キノコ)の仲間です. クロマツの根に住み着く菌は外生菌根菌とよばれ, 松ぼっくりやドングリを实らせる樹木に共生します. アカマツやコナラの樹下で取れるマツタケやトリュフがその仲間です. この菌は細かい根の表面全体を覆いつくし, 根自身の根毛は見えません. その代わりに根毛の直径の1/10以下の菌糸が土壌からの養分や水分を吸収します.